

中野区教育委員会第28回協議会会議録

開催日時 平成20年7月25日(金) 開会 午後1時04分 閉会 午後2時59分

開催場所 中野区役所教育委員会室

出席委員	中野区教育委員会	委員長	高木 明郎
	同	委員長職務代理	大島 やよい
	同	委員	飛鳥馬 健次
	同	委員	山田 正興
	同	教育長	菅野 泰一
事務局職員	教育委員会事務局次長		竹内 沖司
	教育経営担当課長		小谷松 弘市
	指導室長		入野 貴美子
	統括指導主事		田村 正弘
書記	教育経営分野		松島 和宏

傍聴者数 0人

議 事

(協議事項)

1 教科書採択について

午後1時04分開会

高木委員長

ただいまから第28回協議会を開会いたします。

本日、事務局職員は、協議事項の教科書採択に関係する職員として、次長、教育経営担当課長及び指導室長に出席をお願いしておりますので、ご了承ください。なお、次長と教育経営担当課長は、所用のため、おくれて出席の予定でございます。

また、教科書採択にかかわる職員として、統括指導主事に出席を求めていますので、ご了承ください。

教科書採択に関する教育委員会の審議過程につきましては、「中野区立学校教科用図書の採択に関する規則」第 10 条の規定に基づき、採択が行われるまでは非公開とすることが定められております。前回の協議会で確認しましたとおり、本日の協議会も非公開とさせていただきます。

<協議事項>

高木委員長

それでは、前回に引き続き協議を進めたいと思います。

まず、算数から協議を始めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

まず、大島委員、お願いいたします。

大島委員

算数は、各教科書を見比べたのですけれども、私が見た中では、例えばほかの教科書では、6年生ですか、速さについての単元について説明が少なかった。東京書籍のものはきちんと説明がされていたというところとか、それから、やはり6年生ですか、山が幾つもある絵がありまして、どこまで学習したかなというような問いかけになっているところで、1年生の一けたの計算から分数・小数と、6年生になるとちょっと難しいようなので、山が幾つもある絵が、そこを子どもが歩いているような絵で、学習の進みぐあいが一目でわかるような絵があったりするのは大変いいかなと思いました。

あと、東京書籍のは、絵とかに使ってある色が割とソフトな点がいいかなと。ほかの教科書では、原色というか、結構濃い色を使っている教科書もあったのですが、これは好みの問題もあるのかもしれませんが、色はソフトなほうが学習の邪魔にならないかなという感じでございまして、これという違いといいますか決め手は余りなかったように思いますが、現在使っている東京書籍でいいと思います。

高木委員長

次に、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私は3年生の上・下巻を集中的に見てみたのですけれども、今使っている東京書籍の全体的な感想として、いいところは、図であらわされているところは割と丁寧に書いてあるかなと。ただ、図そのものは色がもうちょっとはっきり、いい絵ができればと思いましたけれども、教科書だからいいのかなと。図解がまあまあいいかなと。色別に分けて表現し

てあって、色別の表記もわかりやすいかなという気がします。

あと、いろいろな物が出てきて、物をたくさん使っているということですね。実物、子どもの使っているような物ですね。あと、題材は、ほかの教科書にも共通点がたくさんありますが、子どもたちの身近な生活を取り上げて算数的に考えさせるということだろうと思いますので、東京書籍でいいと思います。

ただ、どう考えたらいいかちょっとわからないので教えていただきたいと思うのは、例えば、東京書籍3年の上の教科書の49ページのところに、「1,000円でお買い物」とありますね。下のほうに、なおこさんの考えとまことさんの考えがあって、1,000円から買ったお金126円というのを引いておつりが幾らかという計算なのですけれども、左のは、普通私たちがやっているように繰り下がり計算していくわけですが、右側のまことさんの考えは、繰り下がりを使わない計算をするために最初に1円引いてしまって999円から引いていって、繰り下がりを使わないで最後に1円を足す。これは、考え方としてわかるのですけれども、子どもはこういう発想が出るのか出ないのか。教科書に書いてあって、これは何のためにこうなのかなという気がするのです。実際に使う場面というのは非常に少ないと思うのですけれども、考え方の多様性ということではわからないでもないのですが、何のためかなという、実用なのかどうかよくわからないというのが一つあります。

それから、あと、暗算のところがありましたよね。これも今回出てくる。今の教科書でいうと62、63のところの暗算で、別の教科書ですと、一の位と十の位のところの書き方が、東京書籍のは、普通私たちが考えるような書き方で書いてありますが、ほかの教科書でいうと、もうちょっと色分けしてあって、縦の計算で我々がやるようなのが書いてあったのです。最初に教科書に書いてしまうと、それにとらわれてしまうから発想の豊かさが出てこないということなのだと思います。要するに、あちこちでPISA型学力を育てるのに一体何かというのがよくわからないというか、どこまで出したら子どもの想像力とか工夫するとか考える力が育って、どこまで出してしまったらだめなのかとか、その辺がよくわからないので、算数というのは割とそういうことがたくさんあるのだなという気がしました。何が悪いということではないのですけれども、一つ一つ考えが違ふのだと思いますけれども、こう考えるといいよということがあったら教えていただきたいなと思います。

以上です。

指導室長

既習の事項を生かすということになると、けた数が少ない繰り下がりはとりあえずはできるという、そこから持ってくる子がいますし、繰り下がり勉強する前には、繰り下がりが余り得手ではないので、できるだけ繰り下がりを使わない方向で考えていくという考え方も出てくるのですね。このけた数がもっと小さい場合、子どもの実態としてそういうのがありますので。繰り下がりがあるときも、繰り下がりがないときも、基本的には引き算は同じなのですが、子どもの発想としては両方出てくる実態があるので、こういうふうに例示があるというふうに思います。繰り下がりがすごく不得意な子どもが一生懸命考え出した結果こういうものが出てくるということもあるのですね。そういう実態があるということと、子どもたちにはチャレンジの仕方がいろいろあるよということを教科書でも教えるという意味があるかというふうに思います。それは先ほどの「1,000円でお買い物」の部分ですね。実際、1,000円でお買い物の場合に、お金になってくると、1000円札で買い物をする場合もありますけれども、100円を幾つ持っていてという買い物の仕方もあるわけですので、そういうことを実体験的にやるとこういう考え方も出てくるということですね。

それから、暗算の部分については、多分、暗算ですので、子どもたちが頭の中で計算する仕組みがいろいろございまして、その仕組み自体がこの3通り——子どもたちから3通り以上出てくる場合があるのですが——が大きなパターンであるかなというふうに思います。ですので、筆算というのが頭の中に浮かぶ子どもと、そうではない暗算のやり方というのがありますね。ですので、そういう意味でここはあえてこうなっているのではないかなというふうに思います。

飛鳥馬委員

こういうふうに考えるほうがかえってわかりにくいなどと私は思ってしまったんですが。十の位を先にやって。

指導室長

計算の仕方を知っている大人が考えるからではないかと。

飛鳥馬委員

なるほどね。わかりました。

大島委員

そう考えると、結局、先生のこの教科書の使い方による部分もあるのかと。今の指導室長のご説明を聞くと、1000円札の繰り下がりのも、なるほどな、こういう例が出てくる意

味もあるかなと思うのですけれども、これだけ見ると私などは、繰り下りの勉強をするためには、こういうふうにかえて易しくしてはだめではないか、1,000 円から引くほうが勉強になるではないか、999 円というのは余り意味ないのではないかと思ったりするのですけれども、今のご説明とかがあると、なるほど、そういう存在意味もあるのかなと思ったりするので、先生のそのときの指導方法というか、持っていく方などによって生かされるとか、そういう部分も大きいのかなと思ったりするのです。

高木委員長

次に、山田委員、お願いいたします。

山田委員

いわゆる理数離れが進んでいるということになると、算数との出会いというのは大切なのだろうと思うのです。現行の学習指導要領の教科目標の中に、日常の事柄について見通しを持って筋道を立てて考える能力ということになると、日常に親しみやすい、子どもたちにとって生活に密着している内容というのが一つのポイントとして出てくるのかなという気がして、具体例が出ているとか、図がわかりやすいということで、そういったことが子どもたちの学習意欲を喚起するということにもなるのかなと。

あと、これまでの意見の中には、教科書に書き込みができるほうがいいというような意見も出ているのですけれども、この辺はいろいろと賛否両論があるのではないかなと思います。

そういった視点で、私たちが日ごろなれているのは十進法なのですけれども、僕は、時計との出会いというのはどうなのかなということで、3年生の教科書を中心に見てみたのです。東書は、「時間の仕組み」という形で、起きてから学校に行って、学校でのまち探検、そんなことをやっている。啓林館は「動物園での1日」ということで時間ということをおぼわしている。教育出版は「時刻と時間」ということで、これもやはり起床から寝るまでの1日のことをやっている。学校図書は、「時間と時刻」という形で、運動会の日を当ててやっている。子どもたちをいわゆる十二進法というか六十進法にならせるというのは非常に難しいことではないかなと思うのですけれども、東書のいい点は、15 ページにあるように、例えば「時間と時刻」というふうにかなりわかりやすく書いてあるのです。「家を出た時刻は7時45分ですよ。学校に着いた時刻は8時ですよ。その間が時間なんですよ」というような記載があるわけです。要するに、子どもたちにとって時間とか時刻というのはわかりにくいのではないかなと思って、これは非常にわかりやすく書いてあるかなと思

ています。ですから、そういった意味では、時間のあらわし方とか、「物知りコーナー」で、18時46分と午後6時45分という、その表現の仕方とかも東書は結構丁寧に挙げているので、わかりやすいのかなというふうに思いました。

それから、5年生ですか、平行四辺形の面積の求め方なども、考え方を二つ例示して、長方形とどういうふうに違うのかということを図を挙げて例を出している。ほかの教科書もある程度似たようなところがあるのですけれども、そういった中ではわかりやすくなっているかなと。平行四辺形から発展して、「では、三角形はどうなの？」という形に持っていくので、比較的わかりやすく記述されているのかなという気がいたしました。

あとは、戻りますけれども、1年生などでは、仲間を挙げて数字に取り組もうということで、「どんな計算になるのかな」という形で、例えばライオンというくくりだったり、ペンギンというくくりだったり、仲間を挙げてというような、子どもたちに親しみやすい内容になっているということで、導入の部門から3年生ぐらいまででともかく数字になれるとかいうことを一つの考え方として持っているのではないかと。

一方では、高学年になってきますと、生活の中での算数ということで、例を挙げますと、一步の歩幅がわかっているならば、何歩歩いたかで歩いた距離がわかるよねというような形で、算数と日常生活がわかりやすくなっているということは、子どもたちにとって使いやすいし、教員にとっても教えやすいのではないかなというふうに思います。

また、一つの情報の中では、食育などの関係でも、給食大調査みたいなものが東書に載ってまして、ほかの教科との関連もあるのかなということで、大島委員がおっしゃったように、ほかの教科書会社のもものもそんなに遜色ないといえば遜色ないのでけれども、比較的わかりやすい構成になっているという東書で、今回もそのまま継続して問題はないのではないかなというふうに思いました。

私からは以上です。

高木委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

算数ですけれども、国語と並んで、基礎的・基本的な教科でありまして、すべての子どもたちに基礎・基本の習得、それから、進んで算数が好きになるような、そういった態度を身につけさせたい、そんな教科だと思います。そのためには、特に低学年のわかりやすさと工夫が必要だと思っております。高学年でも特につまづきやすい分数とか図形など、

そういったところをわかりやすい説明と工夫が必要だろうと。そんなことが教科書に求められると思います。前回は東京書籍だったわけですが、その折にも、そうした低学年のわかりやすさというのが非常にポイントが高かったのではないかと思います。ですので、今回学校で使ってみて、学校の評価というのですか、それが非常に重要だと思います。今回出てきております算数に関する学校評価ですが、見たところ非常に好評で、否定的な意見がほとんどございません。前々回は東京書籍だったので、そういう面でいくと、なれているというのがあると思いますけれども、使いやすいという評価がされているのだと思っております。

現実に教科書を見てみても、絵と文、それから数式、色づかいなど、どちらかというところとすっきりとした編集がされている教科書だと思います。それから、「確かめよう」「覚えているかな」などということで、復習もしながら、段階的な学習をしていくような工夫がされております。そういう面では、基礎・基本が自然に身につくような編集だということで、中野区の目指す全体の底上げという課題にマッチした教科書だと思います。また、新学習指導要領でも、日常生活と関連づけた教え方をこれから求めるというようなこともありますので、そういった生活との関連の記述なども多く、そういった姿勢が先取りされている教科書だと思っております。

そんなことから、今回、学校意見などを見ても、児童意見などを見ても、算数についてこのままでいいのではないかという意見もありますし、あと、選定調査委員会の意見でも問題ないということがございますので、このまま東京書籍を続けていってよろしいのではないかと考えております。

以上です。

高木委員長

最後に、私からでございます。

私も、学校の意見ですとか選定調査委員会の意見を見ると、算数はほとんどこれがいいというのがかなりはっきりと出ている教科なので。だから、ただ単にいいということではなくて、一通り見させていただきました。特に私のほうでは、自分の子どもが4年生ということもあるのですが、学校公開で見たとき、中学年の「折れ線グラフ」という単元で東京書籍で東京とシドニーの年間月別の気温の比較というのをやっていた。これは算数だけではなくて社会的な要素も入っていて、いわゆるリーディングリテラシー、今求められている「考える力」というのですごくいい切り口だなと。今回、ほかの出版社を見ますと、

啓林館さんが同じように東京とシドニーの気温の比較をしているのですが、両者の4年生の上を比べると、東京書籍のほうがまず東京とシドニーの各気温の表、それから東京とシドニーの別々の折れ線グラフ、それから東京の棒グラフ、で、こういう切り口があるよ、ああいう切り口があるよと言って、最後に重ねてみて比較しようということ、考えさせるということは、誘導ではないのですね。子どもを非常にうまく持っていつているなという気がします。

もちろん、ほかの教科書も、検定教科書ですから、どれも悪くはないのですけれども、そういうのを見ても、東京書籍は、先生方がこれがいいというだけはあるなということ、自分的にも納得しましたので、私も東京書籍がいいのではないのかなというところがございます。

飛鳥馬委員

さっき山田委員が言われた時刻、時間は難しいのかなと思うのですけれども、やはり3年生で出てくるのだらうと思うのです。小学生は、十進法以外、六十進法というのかどうか、時計などは違う、そういうのはつまずきやすいのですか。うちの子どもなどはなかなか覚えられなかったと思うのだけれども、1時間は60分という考え方。計算がこれに出てきますね。今までの算数の計算と違う。それは子どもにとって難しいですか。生活が先行してしまっているから、どうしていますか。

指導室長

まず、今こういう時計を見なくなりましたので。そういうことからいっても、60分がとらえにくくなっているということはあると思います。そういう時代ではない前も、比較的わかりづらいことはわかりづらかったというふうに経験上思っておりますが、今は特にそういう状況になってきていると思います。

飛鳥馬委員

家庭で覚えてくるというのは少ないのかしら。昔、親が教えたではないですか。「もう〇時よ」とか。学校で教わる前にうちで。

高木委員長

この形だと、何時何分というのは子どもはパターンで認識できるのですが、「3時と4時半の間で何分？」と言われると計算ができないというのは低学年ではありますし、特に特別な支援が必要な子どもたちは、その概念を見つけるのはなかなか難しいです。正直申し上げて。特別支援学級でもやっていますよね。時計のやつは何回も繰り返して。うちの子

でも、普通の二けた、三けたの計算はまあまあできるようになったのですが、時計はまだちょっと苦手ですね。換算しないといけないので。

飛鳥馬委員

算数教材のセットに入っている時計がありますが、あれは何年で配るのですか。

指導室長

算数セット自体は、セットになっているものと、いろいろなものが入っていますので、1年のときから使ってまいります。もちろん、それはこういうアナログといたらいいのでしょうか、文字盤の時計でございまして、デジタルではございません。

飛鳥馬委員

わかりました。

高木委員長

低学年用のそういった市販のものでも、分を動かすとカリカリカリッと時計上の動きをする、それは今結構安くありますけれども、自分で回しても、すっといく子と、つまずく子は理解するのはなかなか難しいと思います。

飛鳥馬委員

わかりました。なるほど。

もう一ついいですか。単位でいうと、今のは3年生の上で、東書は36、37、38、39ページに、容積のデシリッターからリッターからキロまで出ているのですがけれども、子どもの生活からいうと、こんな大きい1キロリッターまで教えなければいけないのかどうか、どうなんですか。身近でいうと、この39ページにある牛乳のパックとか、ソースとか、その辺の何リッター、何十ミリリッターとかいうのはわかるのですがけれども、デシリッターからキロリッターまでというのは、これは単位的にここまでやらなければいけないのですか。3年生の算数。

統括指導主事

やらなければいけないかということについては、リットル、ミリリットルについては教えるものとするということで、キロリットルについてはいわゆる発展的な学習として取り扱っております。

飛鳥馬委員

なるほど。それで出てくるのですね。子どもの生活の中から、なかなかキロリッターまでは出てこないかもしれないね。なるほど、発展的な学習ですね。わかりました。

山田委員

委員長、1点よろしいですか。

学習指導要領の改定に伴う移行措置の中で、理数系について、特に算数・数学及び理科は、場合によっては教材を整備してというような話が出ているのですが、そういったことを考え合わせて、今の教科書で特に問題はないのかどうか。あとは、授業時数がふえるわけですね。そういうことに対応するためにということで何かお考えがあれば教えていただきたいと思います。

指導室長

文部科学省のほうは、これについては方針を出しております、教科書会社のほうに移行期の対応の部分については、今回はプラスアルファになる部分が多いものですから、今の教科書で教えないところが出てくるというよりは、プラスアルファになる部分が多いものから、対応をそれぞれが考えるようにというふうな指針で指導していくということを出しておりますので、教科書については現行のものであっても対応は可能になってくるかというふうに思います。

高木委員長

算数は授業時間数がふえるのが一番多いのですよね。

統括指導主事

算数につきましては、現行では6年間で869時間教えることになっているのが1,011時間にふえますので、ふえる幅としては一番多くなっております。

高木委員長

家庭科全部よりも多いですね。家庭科が115ですから、それより多くなってしまいうう。

飛鳥馬委員

今の時数でいうと、平成21年、22年、移行期間から1こまふやした分でやるわけですね。算数、理科で両方で1こまになるのですか。週1時間ふやした分は。

統括指導主事

算数と理科に限らず、その他の教科等も含めて移行措置期間中の時数というのは定められております。

飛鳥馬委員

単純にいうと、現行でいうと、算数が5・6年生は4.3時間が5時間になって、理科が

2.7 時間が 3 時間になる、両方合わせれば 1 時間分になるという、そういうあれですかね。

統括指導主事

5・6 年生についてはおっしゃるとおりです。

高木委員長

移行期間の措置も勘案すると、現行の東京書籍で採択が適当ではないかというところに集約しつつあるかなと思うのですが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

高木委員長

それでは、ご異議ございませんので、算数は東京書籍を採択候補といたします。

次に、理科について協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

まず、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

理科は、5 年の上・下を中心に見てみたのですが、教育出版のは上と下の厚さが全然違うんですね。これ、わかったら、後で教えてください。上が 112 ページあって、下は 36 ページしかない。3 分の 1。これは何か意味があるのだろうと思うのですけれども。

それで、5 年生の上のほうでおもしろいな、いいなと思ったのは、最初は、生物ですか、植物観察みたいなものが出てくるのですが、インゲン豆か何かの種をまいて大きくなるという、発芽に必要な条件などというので、水と温度と空気が必要だという実験が載っているのですけれども、こういう割と易しい実験というのは、学校でやらなくて自分の家でもできる、家族でもできそうだというのでいいなと思います。ただ、その結果が教科書に非常に丁寧にきちっと書いてあるということがいいのかどうか。実験だから、やらせて、答えは書いていないほうがいいのかと思うのですけれども、教科書にちゃんと実験の答えまで載ってしまっているというのがどうかなという気もしないでもないのです。

あともう一つは、人の誕生のところですね。受精して誕生するまでのことがあって、50 ページに胎児の等身大の写真が出ている。これがすごいなと思うのです。これと、保健の男女の特性みたいなものを書いたものがありました。わかりいいのですけれども、理科ですから、この辺までのところはおもしろいといえばおもしろいでもいいのかなと思うのですけれども、次に超音波の写真まで出てくるのは、理科で必要なのかなと思わないでもないのですけれども、保健の授業との連携が必要だと思うし、丁寧に書いてあるなと思いまし

たけれども。

それから、下のほうは薄いのですけれども、「物の溶け方」と「おもりの動き」という、この二つしか内容が載っていないのですね。みょうばんと塩を溶かして、溶け方のことが半分ぐらい書いてあって、後ろ半分がおもりの動きとその働きということ、そういう内容なのです。非常に丁寧に書いてはあるのですけれども、これは学校でも家庭でもできるのかなと思いますので、実験としては非常に丁寧でいいなというふうに思いました。

全体としては、アトムキャラクターが出てきて、子どもたちの身近な生活のものをたくさん取り上げてありますので、まあまあ使いやすい教科書であるかなというふうに思います。教育出版です。

以上です。

高木委員長

次に、山田委員、お願いいたします。

山田委員

理科は、1・2年の生活科に続いてということで、「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験等を行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てる」と教育の指導が載っているわけですが、生活科からの引き続きということになると、3年生の中で、例えば今、中野で使っています教育出版においては、野原や校庭での自然観察とか、比較的子どもたちの回りにあるものを取り上げて、それを虫めがねを使って観察するというので、理科というものに対して余り抵抗がないようなものが書かれているというふうに思います。子どもたちの発達段階に応じてということの視点で書かれている文章なのかなと、特に教育出版のものは考えられますし、キャラクターとしてアトムを使っているのですけれども、そういったところも子どもたちに比較的人気があるのではないかなと思います。

学校図書以外は、すべて理科が上・下巻の編成になっているのですね。先ほど飛鳥馬委員がおっしゃったように、教育出版は上・下の厚さが違うのはなぜか、私もわからないので教えていただきたいと思います。ただ、総ページ数は、教育出版は比較的多いほうではないかと思います。

題材としても、例えば栽培しない観察植物とか、飼育しないような動物などについても比較的多く取り上げていますので、都会の中の中野区の子どもたちにとってはいろいろなものに触れるということでは比較的好い教科書ではないかなというふうに思いました。

やはり私も、保健体育とのつながりの中で、いろいろな動物の誕生について調べようと

ということで、どの教科書も人の誕生のことについてはかなり詳しく触れていますし、飛鳥馬委員は懸念されていましたが、超音波の写真は今お母さんたちが皆さん大切に保存されていて、「胎児のころから大切にされていたんだよ」ということの一つのあらわれで、それが教科書にも入ってきている。これほどこの教科書にも入っているのも、一つは、これだけ科学が進歩してきていて、「あなたが生まれる前からお母さんたちの仲間なんだよ」というようなことを知らせる意味では、題材としてはいいのではないかなと思うのです。もしかしたら、将来的にはもう少し立体的な画像が出てしまう可能性もあるわけですが、そのぐらい進んでいることは事実であります。

その中で、例えば教育出版などでは、羊水はおなかの中の揺りかごとということで、卵子とか精子とか受精、子宮、胎盤、これは多分保健のほうの教科書とある程度リンクしている。子どもたちは体の発育の中で3年生ぐらいから体の変化を学んでくるわけで、それを今度は理科の中で、理科という自然科学の中で学んでいく。

あともう一つ、子どもたちの意見の中では、いろいろな実験ができるような教科書、実験のものがよく工夫されている教科書というのがあるのですけれども、実験に使う道具に対して比較的よく書かれているのは教育出版ではないかと思います。理科離れの子どもたちを引き寄せる意味で、実験というのは非常にインパクトがあるわけですので、そういったものに使える教科書という視点からも、今の教科書は中野の子どもたちに適しているのではないかというふうに思いました。

私からは以上です。

高木委員長

次に、大島委員、お願いいたします。

大島委員

私は、3年生と6年生の教科書を主に見させていただいたのですが、全体の印象としては、指導要領にある単元については、みんな必要な知識などを取り上げてやっているのも、内容的にそんなに遜色がないというのが全般的な印象なのですけれども。教育出版のもので、いいなと思った点は、3年生の13ページですか、植物の芽の対応について三つぐらい取り上げて、発芽の様子を写真で載せているのが大変わかりやすくいいのではないかと。これだけ丁寧に写真で載せているのはほかにはないように感じました。

あと、63ページに池と周辺の絵があって、「昆虫のいるところにシールを張りましょう」というのがあるのですけれども、この辺などはなかなかきれいで、子どもの興味をそそる

ような内容で、楽しくていいのではないかなと感じました。

あとは、教育出版で特徴的なのは、さっきもちょっと胎児の絵が実物大であるというお話があったのですけれども、体の消化器官の様子がページとじ込みになっていまして、あけると実物大で大腸とかの絵があるのです。非常にリアルでわかりやすいといえればわかりやすいのですが、ちょっと大きいし、若干グロテスクな感じが私はしました。

それと、人間ではなくて魚の消化器官の写真みたいなものがその次のページにありまして、魚についても中の絵というのが大きく出ていまして、その辺のリアルさを追求しているのが特徴かなと思うのです。個人的感想としては、人間の消化器官とかの説明については、むしろ東京書籍のほうが、簡略なイラストなのですけれども、仕組みがわかりやすかったかなというふうな感想は持っております。でも、別に教育出版のものもちゃんと説明はされていますし、特に問題はないと思います。

全体としては、教育出版のもので、全体に大変よくいろいろなところに説明がされていますし、特に問題はないのではないかなというふうに思っております。

以上です。

高木委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

理科ですけれども、自然に親しみ、見通しを持って観察・実験などを行い、問題解決能力と自然を愛する心情を育てるというようなこと、科学的な見方・考え方を養うというようなことが目的とされているということから、そういう面では、魅力的な写真などを配置し、自然の観察に意欲を持たせるとか、あるいは実験の記述が丁寧でわかりやすいというようなことが必要なのだらうと思っております。

私は、比較しにくいというのがあるのですけれども、東京都の資料の 94 ページに内容の比較が出ているのですけれども、これを見ますと、Aは生物、Bが物質とエネルギー、Cが地球と宇宙ということですが、教育出版は内容区分の量がみんな多いですね。これは何なのかなと思うのですけれども、素材をいっぱい取り上げているというのが特徴だと思うのです。あるいは、実験観察数などを見ても、教育出版は飛び抜けていますし、物づくりなどの量も多いということから、割と細かく詳述しているというのが教育出版の教科書の特徴だらうと思っております。

もう一つ、下のほうにもちょっと書いてあるのは、調査結果のAのほうにも書いてある

のですけれども、教育出版は生物と環境の割合が多いというようなことがあります。そういう面で行きますと、中野のような割と自然に恵まれないようなところでは、そういった生物に重点を置いたり、あるいはある程度自然にというか、経験がなかなかできにくいようなこういった都会では、資料が多いほうがいいのかなどというふうにも思っております。

それから、学校の評価ですけれども、この理科の学校の評価を見ますと、ほぼ好評なのではないかと思っております。それから、現場の先生方については、教育出版の教科書については実験の図解などが丁寧で、観察・実験等に関して使いやすいという意見が出ております。また、環境問題を積極的に取り上げ、自分たちの行動と結びつけるなど、新しい課題に沿った内容であるというような意見もございます。そんなようなことから、教育出版の教科書について、他と比べ、どこというのなかなか難しいのですけれども、やはり中野区の教科書としては適切ではないかということで、引き続き教育出版の教科書でよろしいのではないかと思っております。

以上です。

高木委員長

最後に、私からです。

現行の教育出版の教科書は、教育長からも指摘がありましたように、生き物を育てるところが非常に細かく出ているのがいいなど。実際、私も小学生の子どもがいるのですが、ここに出てくるところで、例えばモンシロチョウですとか、アゲハチョウですとか、バッタ、トンボというのは、実際に中野でもつかまえて飼えるものなのですね。そういう点で、うちの子は余り世話をしていなかったのですけれども、中野のように自然に余り恵まれないところで、身近な生き物で観察が具体的にできるようになっているところは、私はすごくいいなと思っております。

あと、4年生ですか、ペットボトルを半分に切って、水と水草を入れてメダカを飼うというのを、学校の視察に行ったときに、どこの小学校でもば一とやっていて、これでは酸素が足りないのではないかなどとちょっと心配したりしたのですけれども。ほかの教科書を見ても、ペットボトルでも飼えますよというのは載っているのがありますが、大々的に取り上げているのは教育出版。大きな水槽をたくさん用意するというのは難しいですから、あれはなかなかうまいなという気がしました。学校の先生方の評価もいいですし、私も教育出版でいいのではないのかなと思うのです。ほかの出版社のを見ても、上・下で、下が薄いという傾向は若干あるようなのですが、私も何で違うのかちょっと疑問なので、

わかる範囲内で教えていただけますか。

統括指導主事

それでは、上・下のことなのですけれども、教科書会社の編集趣意書のほうに書いてあるので、教科書会社のほうの意図としてではなくて、使うほうの立場としてちょっとお答えさせていただきたいと思います。

まず、下巻というのは年度途中に配付されるのですね。ですから、4月当初に配付されるのは上巻だけになります。そうしたときに、例えば5年生を見ていただきますと、上巻の中には、1番から5番までに物理・化学教材が一つも扱われていないのです。どこの会社も大体生物教材から入っていくというのが多いようです。そうすると、自然環境によっては順番を入れかえたい地域も当然ありますね。例えば寒い地域などは、4月に外へ出てということができない。そういうときには単元を入れかえて指導する場合がございます。そのときに入れかえる単元として物理・化学教材というのが通常対象になってくるのですね。室内でできますので。そうしたときに、上巻の最後に、てこ・左右のつり合いというのが入っていれば、例えばこれを4月の当初に持ってきても学習できるというようなこともあるのかなと思いますので、上巻を厚くしておくことによって、学校の実態に応じて、例えば校庭の花壇を整備しているときにはここは後回しにしようとか、そういった単元を入れかえるときに扱いやすいという利点がございます。下巻が薄いということについては特に弊害はございませんので、そういった点でやられているのではないかなと、使う側から見ると思われます。

飛鳥馬委員

年度途中に配られる教科書というのはまだほかにもあるのですか。4月に配らないものというのは。

指導室長

基本的には、上・下に分かれているものの下巻は、今まででいいますと、大体9月の下旬から10月に使いはじめることとなりますので、夏休み明けに配られるというのが通常のパターンでございます。

飛鳥馬委員

それは何か意味があるのかしらね。つまり、小・中一貫校ではないけれども、早目に終わらせてしまって、あと残った時間を補充に充てるみたいな、そういうのはできないね。そういう意味はないのか。昔からそうなのですけれども、上巻は分厚い。

教育長

そうしたら、よその出版社もそうすればいいではないかと思ってしまう。さっきの話なのだけれども、それはどうなのですか。

統括指導主事

例えば学校図書は、この版ではすべて合本になっておりまして、上・下に分かれていないのですね。恐らくそういったことも配慮しているのではないかなと。東京においてはほとんどこの順番で行いますので、中野区ということを見ると、この厚さの差は気にはならないし、合本であっても合本でなくても大きな差はないかと思われまます。

大島委員

この 16 年度の中の教科用図書調査研究結果報告、調査研究会の資料によると、教育出版に対しては厳しい意見が結構あるようで、ごちゃごちゃ詰め込み過ぎているとか、ごたごたした感じがするとか、むだなイラストが多いとか、余りプラスの評価がないようにも思えるのですが、これは専門の委員の方が調査した結果ということなのですか。

指導室長

基本的には、小学校は理科専科はおりませんので、調査委員には、小教研などで理科を専門に勉強してきているような教員を中心に委嘱しております。ですので、一般の教員よりは多少理科を中心に勉強してきた教員に分析してもらっているというところではあります。

統括指導主事

つけ加えて言いますと、前回の学習指導要領の改定で理科の時間数が減らされました。それに伴って内容も大きく減ったのですけれども、教育出版は、そういう意味では教科書の分量では減る度合いが少なかったということで、総ページ数も他社に比べてかなり多いかと思えます。そういった意味で、時間が減ったということと、その内容がそれほど減らなかつたということの感想かなと思えますし、逆に、それが今、先ほどからご指摘があるように、内容の充実という面でも生物教材でこれだけページ数を割けるというような利点にもつながっているという面があります。来年度からは時間数はふえますので、そういった意味では扱える内容になってくるのかなと思えます。

高木委員長

移行措置では、21 年、22 年度から 350 から 405 といきなり 50 時間もふえるのですね。それを考えると、もともと厚い現行の教育出版を使うのはメリットがあるのかなという気

がします。もちろん、範囲も若干変わってくるので、これが全部分かれるということではないと思うのですけれども。ほかのに比べると少ないロスで対応できるのかななどという気がするのですが。

飛鳥馬委員

理科で1時間ふえる分の、分野別にいうとどういう内容ですか。

統括指導主事

分野ごとに何時間割きなさいという時間での規定はされていないのですけれども、内容的に大きくふえるのが、3年生の物理分野、それから6年生の物理で電気の学習、それから6年生の体のつくりのところ、今度は内臓すべてを扱うということでふえます。大きなところではそのぐらい。あと、単元の学年間移動は結構あるのです。例えば、てこが5年から6年にきて、6年の電磁石が5年におりるとか、そういったような移動はございます。

飛鳥馬委員

基本的には、前の学習指導要領に載っていて、現在ののに削られたものが復活したと思っ
ていいですか。

統括指導主事

おっしゃるとおりで、復活単元が約3分の1、それから中学校からおりてきた単元が3分の1、新規単元が3分の1という感じでふえます。

飛鳥馬委員

つまり、理科離れとかとどういう関係があるのか。文科省が言っているように、理数を重視しなければいけないとか、ふえた分との関係が。体の仕組みなんか関係あるのかなと思うけれども。

山田委員

生きる力という、自分の体のことをよく知るということは、理にはかなっているかなという気がします。

飛鳥馬委員

わかりました。

山田委員

ちょっと教えてほしいのは、中野区で理科の授業をやっていく上で専科的な話は今どのような状況で進んでいるのかということと、あと、生活科との連携について、その教材としてこういうほうがいいのかということはないのでしょうか。その2点です。

統括指導主事

まず、中野区で、一般教員で理科を専科としているというのはございません。講師対応のTTを入れている学校が数校あります。あと、中野区の特徴としては、例えば理科支援員を短時間ではございますが導入していて、先ほど話題になった魚の解剖については理科支援員のプログラムの一つに入っております。

もう一つのご質問ですけれども、生活科との単元では、今回はかなり重視されておりまして、例えば3年生に「風やゴムの力で動くおもちゃづくり」というような物づくり、おもちゃづくりから入っていくような理科の学習が今度新しく導入されます。

教育長

理科支援員だけでも、どのぐらい入れているのでしょうか。

統括指導主事

今年度は各学年約2回です。1回が2時間続きでございますので、各クラス4時間分ということになりますので、大体二つの単元について発展的な学習を行えるということです。

山田委員

移行期で授業数がふえてくるとなると、支援員についてもできれば拡充したいと……。

指導室長

今、中野は学生を導入しているわけではございませんので、発展的な学習ができるようにというので、ある程度の専門家の方に入っていて、担任と学校のほうが選んだカリキュラムの中で発展的な学習をやっていただくという形になっています。今のところは、専門家の確保というのも難しゅうございますし、もちろん、予算の面の問題もありますので、今後検討は必要かなというふうには思います。

先ほどの生活科のほうについては、ごらんになったことがあるかと思いますが、
「ゴムで動くおもちゃ」という部分は、おもちゃをつくる単元ではないのですけれども、よく活動の中に組み込まれることが生活科でございますので、その生活科の活動を生かして理科へつなげるということでのお話でございます。あとは、生活科でも植物を育てたりいたしますので、そういう部分では多少関連があるかというふうに思います。

山田委員

教科書とは関係ないのですが、理科の時数がふえるということで、例えば人体の仕組みとかそういうのがふえるということであれば、例えば配置されている学校医にうまくお願いしてということもできなくはないと思いますけれども。

高木委員長

大体意見が出そろったかなど。確かに教科書の厚さというのは素朴な疑問なのですが、言い方は変ですけども、特にこれがデメリットということではないのかなど。むしろ地方によってはこれがメリットになる場合もあるというふうに理解をしたいと思います。そうしますと、現行の議論の中では、教育出版がよろしいのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

高木委員長

ご異議ございませんので、理科は教育出版を採択候補とすることにいたします。

次に、生活について協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

まず、山田委員からお願いいたします。

山田委員

生活は、1年生、2年生で学ぶもので、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会、自然とのかかわりに関心をもち」ということが挙げられているのですけれども、これから大切な時間ではないかと思うのです。こういった生活科の中で、例えば道徳性を育成するとか、そういった中で体験活動をしていくとか、自然との触れ合いということで、生活のスキルの習得をするというか、そういった意味では大切な授業になるのではないかと思います。

今、中野区は大日本図書を採択しているわけですが、この教科書は上・下に分かれていまして、「なかよし」「大すき」というような大きな単元があって、その中でも、比較的絵が親しみやすく、写真が豊富であるという点では、ほかの教材よりはいいのではないかなど。児童にとって比較的親しみやすいというふうに思います。

生活科の中でも、道具の使い方というのが巻末に載ってまして、例えば「どうぐをただしくつかおう」ということで、「きる・あける」で、はさみだとか、きりの使い方とか、「つける・はる」で、のりとかテープの使い方とか、比較的丁寧に記述をされている点では、子どもたちにとっては使いやすい教科書ではないかなというふうに思います。

あと、自然とのかかわりの中では、子どもたちの活動の参考となるような植物名だとか昆虫名などがかなりきれいに配置されているように思いました。

また、1年生で使う教科書では、国際理解教育の配慮がありますので、中野区の子ども

たちにとってはよくできている、使いやすいというふうに思います。日文でしたか、中野区を取り上げて、たしか新井薬師の商店街が出ているのですけれども、まち探検の中でも同じですけれども、そういうふうに取り上げているところもありますけれども、今使っている大日本で特に問題はないのではないかなと思いました。

私からは以上です。

高木委員長

次に、大島委員、お願いいたします。

大島委員

今使っている大日本図書の教科書ですけれども、大変いいのではないかと思っているのです。まず、全体的に見たところ、これは生活科ですから1年生、2年生という低学年の児童が対象なので、その低学年の児童にとって大変楽しい、この中が楽しげだというのがまず一番最初の印象でした。キャッチフレーズの「ともだちいっぱいいるよ」とか、「動物もともだちね」とかいう、こういう文字が活字でなく手で書いたような文字にしてあって、しかもカラフルにしてあるというところから始まって、わかりやすいというのですか、扱っているテーマが児童にとってはわかりやすい。ぱっと見たところ、それが第一印象。

それと、日本のお正月とか、たこ揚げとか、そういう昔からの風習みたいなものも取り上げているのが大変いいのではないかなと。私たち、日本での生活だということで、日本的な古来のものもいろいろ取り上げているということもいいですし、45ページですか、薄いパラフィン紙のようなもので草の絵がかいてありまして、これをめくると何が隠れているかなということで、次のページにいろいろな昆虫が出てくるという構成になっているのですけれども、この辺も大変楽しいと思います。そんなことで、児童にとっては、これを見て、楽しみながらいろいろな自然と触れ合ったり、まちの探検とかも楽しい感じで親しめるといふ点がとてもいいのではないかなと思います。

以上です。

高木委員長

次に、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

大日本図書のほうのあれですが、上のほう、「なかよし」というふうになっていますが、理学的内容が多いのでしょうか、春・夏・秋・冬みたいなことで、季節の移り変わりや自然の変化みたいなことで、それが動物というよりも昆虫とか何かで子どもとのかかわりが

出てくると思うのですけれども、子どもにとっては楽しい、教科書というよりも絵本というか、自分の身の回りのことを考えながら、これを見ながら楽しめる、そういう教科書だと思いますので、1年生にはよろしいかなと思います。

下巻のほうは、前半は割とそういう自然的なこともあります、後半からは社会科的なまち探検みたいな、「まち大すき」といってまちの様子が出てきますが、上も下も一貫して出てきているのは、友達と一緒にとか、まちの人を訪ねてとか、まちの人と一緒にとか、そういう人間との関係の中で自然とかが出てくる。そういうところで、3、4年の社会とか理科につながる学習として、昔の理科や社会科を考えるとこういうことかなというふうに思います。子どもにとっては楽しい授業かなというふうに思います。それで、大日本図書は使いやすいのではないのでしょうか。

以上です。

高木委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

9社が出ていまして、その中で、教科書としては、お話がありましたように、絵本のよな感じで、どうなのがいいのかというのは難しいと私は思います。そういう中で、低学年が使うものでありますので、知識中心ではないので、自然と人間社会とのいろいろなかわりとか、例えば自然であれば、非常によい写真とか図、あるいは人間関係であれば、優しい心でありますとか公共心というのが自然に身につくような、そういう教材がいいのではないかと考えております。

その中で大日本図書ですが、編集方針が「主体的に生きる」ということでありますので、その主体性を養うような記述が見られるのではないかと。あと、公共心を養うという部分の記述がかなり豊富に出ているのではないかと考えております。特に人とのかわりを意識し、編集して、人間関係、人間をいっぱい出してきて、人間中心に書かれている。それから、家庭の中での生活もきちんと取り上げられているということでもあります。また、先ほどお話し申しました東京都の資料の中でも、130ページですけれども、大日本図書の場合は写真の数とか挿絵の数かなり多くなっていて、そういう面では、資料が非常に多いということが言えると思いますし、また、安全衛生への配慮活動についても一番多くなっております。

写真をただ大きくしてコメントを載せていくだけでは、教科書のねらいがよくわからな

いし、教師の方々もこれを使ってどう授業をするか、イメージがよくわからないと思いますが、その点、大日本図書については記述部分についてもしっかり書けているのではないかと、ということで使いやすいと思っております。学校意見でも肯定的な意見が非常に多いです、調査委員会の意見でも、内容については問題ないということでございます。そうしたことから、今使っている大日本図書をそのまま継続して教科書としてよろしいのではないかと考えております。

高木委員長

最後に、私でございます。

どうしても理科とか生活だと、生き物のところを私は見ってしまうのですが、例えば東京書籍の1・2年の上の巻末のところに、冬によく見る生き物とか、図鑑的なものがあるのですが、いいのですけれども、例えば東京の子どもがミノムシを見るかということ、今この辺にミノムシはほとんどいないのですね。ミノムシ自体が寄生虫、バクテリアで今ほとんどいないのです。特に東京ではほとんど見られません。あるいはフキノトウとかいっても多分見たことがないと思うのです。3年生、4年生、5年生になってくれば、客観的事実でどんどんやっていっていいと思うのですが、1、2、3年生ぐらいまでは、私は、中野の現状になるべく近い範囲でやってあげたほうが導入としてはいいのかななどという気がします。大阪書籍のほうでもミノムシとかキタテハとかハボタンとかありますけれども、中野の子は余り見たことがないのかなという気がします。

ただ、正直申し上げて、生活は、教科なのですからけれども非常に難しいですよ。多分、先生の自由度もある程度高いのかなという気がします。逆に言うと、大日本図書が教えやすいのではないのかなと。学校からの意見でもそういう意見が多いので。否定的な意見で、昆虫などの拡大写真がちょっと気持ち悪いと感じるものがあったのですが、どれも同じで、昆虫の卵が一つ載っているのもありますので、それを考えると、特段大日本がだめということではないのではないかなと。

あと、日本文教出版で、中野区のことを載っているからいいのではないのかということもあるのですが、よくみると新井ぐらいで、特段中野がトピックスされているわけではないので、この地域の子どもは喜ぶかもしれませんが、本当にピンポイントなので、もうちょっと中野がば一んと出ていけば別ですが、これもそれほど何かアドバイスがないのかなということを見ると、やはり大日本がいいのではないかと。見ていて、やりやすそうとか、都会の中野に合った形で進められるのではないかなという気がします。

先ほどの生活と理科との関連ということですと、逆に、生活のほうから見た場合は今回の学習指導要領の改正では特段変更点はないのでしょうか。生活のほうは時間数は変わっていませんので。

統括指導主事

生活科のほうは、内容等で大きな変更はございません。ですから、飼育、栽培、観察等の活動というのはそのまま生活科のほうでも行われまして、それが3・4年生の理科につながるのでは大きいかと思います。

大島委員

春によく見る生物とかいっても、山に行けばよく見るというものがありますね。

高木委員長

中野でも、例えば江古田の森公園の奥のほうとかに行くといえるのです。ミツバチとかもいますし、トンボもいますけれども、中野区を平均的に見ると、モンシロチョウとか、アゲハチョウとか、テントウムシとか、そこら辺で、あと、カブトムシはお店で売っているという感じが正直なところですね。ダンゴムシはうちの子もつかまえていますね。カタツムリも、ほかの教科書のものは大きいのですよ。中野にすんでいるカタツムリはこんな大きくない。あと、中野の幼稚園生、小学生は、ツマグロオオヨコバイ、黄色と黒の、バナナムシというのを、あんなものをつかまえてどうするのかと思うぐらいつかまえていますね。それを考えると、私の感じだと、大日本が生物的な内容でいうと一番中野に合っていますし、お店の感じも中野とフィットしているかなという気がします。高学年になったら客観的事実でどんどん教えていっていいと思いますし、小さな子どもだと、身近にいないとがっかりしてしまうかなというのが。

いかがでしょうか。生活に関して、おおむね現行の大日本図書というようなご意見だったかと思いますが、大日本図書を採択候補とすることでよろしゅうございますか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

高木委員長

ご異議ございませんので、生活は大日本図書を採択候補とすることにいたします。

当初の予定はここまででございますが、まだ時間に余裕がございますので、引き続き時間まで教科書採択について協議を進めたいと思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、次に、音楽について協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

まず、大島委員、お願いいたします。

大島委員

音楽は、ある意味、取り上げている題材の歌などについての好みとかということと言うと、全く客観的基準がないようで何とも言いがたいのですが、今、中野区で採択しております教育出版につきましては、1年生などを見ますと、まず、いろいろ遊ぼうと。「〇〇して遊ぼう」というテーマで進めていくというのが大変楽しくて、「動物になって遊ぼう」とか「〇〇のリズムで遊ぼう」とか。次に、「素敵な音を探そう」とか、そういうことで、遊びという観点から、楽しそうな構成になっているという点が1年生の導入部で大変いいのではないかと思います。取り上げている曲目も、高学年のほうになってくると、外国の曲も出てきたり、外国のポピュラー音楽なども取り入れたり、クラシックについて小澤征爾さんの紹介などもあったりして、幅広くいろいろなものを取り上げているということもいいと思います。あと、トルコとか、外国の音楽などの紹介があるという点も、これからの国際社会に移っていく日本としてもいいのではないかと。いろいろなことを幅広く取り上げていって、日本の民謡などもありますし、特段問題はないのではないかと思います。別にほかの教科書が悪いということではないのですけれども、教育出版のものが大変楽しい構成になっているので、いいのではないかと思います。

高木委員長

次に、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も、音楽は教育出版がいいと思います。いいところは、音楽はやはり楽しくないといけませんので。楽しさというのは、特に低学年というのは体で表現できることだと思うのですね。じっと座っているのではなくて、体を動かしながら歌が歌えたり、リズムがとれたりという、そういう楽しさという意味で、体の表現ができるということが一つあるかなと思うのですね。あと、体を動かしながら、また工夫もできる。ここでは「創作」などという難しい言葉が使ってありますけれども、友達と考えながら工夫していくということ。

もう一つは、いろいろな種類のものが入っているようなので。要するに、選べるといいですか、いろいろな種類の題材があるので、その中から先生も子どもたちも選べるといいのではないかなと思います。

あともう一つは、これは小学生にはなかなか人気がなかったり、無理なことも多いのかなと思うのですけれども、中学校などでいうと、和楽器ですね。伝統の音楽ということで和楽器等のことも出てくる。そういうことで、バランスがとれているというのですか、ほかの特色のある教科書もありますけれども、バランスがとれていて無難なという意味では、この教育出版でよろしいのかなと思います。

以上です。

高木委員長

次に、山田委員、お願いします。

山田委員

音楽は、教育芸術社、東京書籍、教育出版、この3社から出ているわけですがけれども、前回のときにもいろいろ協議した教科ではなかったかなと思っております。中野区は今、中学で合唱コンクールをやっているわけですがけれども、合唱などの題材としては、教育芸術のほうが比較的多いようにとらえられているわけです。今中野区で使っている教育出版は、比較的ユニークな、独創的な教科書というようなことが言われていますし、現場の学校のほうからの声が、音楽専科の先生方の意見と一般の先生方が音楽としてとらえるのとかかなり温度差があるのかなという気がしております。

そんな中で、今、中野区では教育出版を取り上げているわけですがけれども、比較的、低学年、中学年について丁寧に書かれている、また図が多いということで、子どもたちにとっては親しみやすいのかなということがあります。

あと、特徴的なのは、和楽器とか伝統音楽などの日本の伝統文化的なものとか、民謡を取り扱っているとかいうことでの評価が高いのではないかと思います。大島委員からもご指摘ありましたように、5・6年の教科書の冒頭に「音楽家からのメッセージ」というのがあって、結構インパクトがあるのかなと思いました。

「仰げば尊し」というのは、最近、我々が卒業式に行っても余り聞く機会がないのですけれども、どちらの教科書にも載っています。ただ、教育出版と教育芸術社は歌詞に少し注釈がついていて、例えば「いととし」を「大変早い」とか、「別れめ」を「別れましょう」とか、そういったコメントがついているので、そういった意味では、3社とも同じような形ですがけれども。

音楽というのは、今、特に子どもたちは、多分、生まれたときからなれ親しんでいるので、私たちが昔聞き覚えたようないわゆる唱歌的なものがどんどん消えていく中での選択

というのは、我々にとっても非常に難しい選択なのかなと思うのですが、おおむね今使っている教育出版がバラエティに富んでいるというご意見もありますので、今のままでよろしいのではないかなと思いました。

以上です。

高木委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

音楽については、いろいろ議論したほうがいいのではないかなと私は思っております。一つは、学校の意見でいろいろ意見は出ていると私は思うのです。ほかのものに比べると。この音楽というのは、専科の人が大体いますから、専科の人が書いているのが多いと思うのですが、何が書いてあるかという、「合奏できる音楽が少ない」とか「高学年での合唱曲が少ない」とか、その辺がちょっと問題があるというのですか、何とかしていただきたいというようなことがあるのですか、そんなようなことで、教育芸術社に戻してほしいという意見もあるのです。この背景には、東京都 23 区で教育出版を使っているのは 3 区、あとはほとんど教育芸術社なのです。それで、ほかから異動してくると、中野だけというような——中野だけではないです。さっき言ったように三つあるのですが、そんなようなこともあって使いにくいとか、そんなようなことが背景にはあるのだろうと思っております。

では、どこが違うのか。そんなに違わないのですが、選曲とか、先ほど言いました合唱曲とか合奏曲の割合とかを見ますと、確かに教育芸術社のほうが高学年の場合は難しい曲がたくさん入っております、そういう面で行くと、そういう指導をするような教員にとっては使いやすいのかなと思っております。これに対して教育出版は、つくる活動とか、身体表現の教材が特に充実しております、日本の歌や世界各国の歌などは教育出版のほうが多いです。

これは余談になりますけれども、曲の数だけいえば東京書籍が一番多いのです。圧倒的にと言っていい。

そんなことで、これをどう考えるかですが、皆様のご意見は「今のままでいい」ということですので、私もそれでいいと思っておりますけれども、やはりこういった学校のほうの意見も心情としていろいろ出ていますので、どの程度配慮していくかという問題もあると思っております。この教育出版に変えた理由としては、これからの子どもについてはも

う少し体を使った表現でありますとか、つくる活動などについても充実していったほうがいいのではないかとということもあると思います。そういうことで変えてまだ1回、4年ですから、そういう面では、今後もう少し検討する必要があると思いますけれども、次回までにある程度そういうような意見がどう出てくるかについては注視をしていったほうがいいのではないかと。

私も、先ほどいろいろお話しありましたように、今の教育出版の教科書が悪いというつもりはございませんので、選定する教科書としては教育出版で結構でございます。

私からは以上です。

高木委員長

最後に、私からでございます。

区民の方からの教科書に関する意見の中で、特定の科目について唯一あったのが音楽かなど。「音楽科は教育芸術社でぜひお願いします」というふうに。あと、「今の中野の子にはこれが適していると思います」と。ただ、余り細かい理由が書いていないので、多分、これを見ると、学校関係の方かなという気がするのです。学校関係の方がだめというわけではないのですが、今の教科書のどこがよろしくなくて、どこがいいのかなというのをもうちょっと書いていただかないと、ただ意見だと、ちょっと酌みにくい。翻って、各学校の教科用を見ると、今教育長がお話しされたような形で、特に高学年のところはそういう意見があったのかなと。

私は、今、自分の子どもが4年生なので、どうしても中学年をまず最初に見てしまうのですね。それを見ると、現行の教科書は、特にうちの子は笛とかちゃんと吹けないので、例えば「ラ・バンバ」なんてあるのですね。これで、歌、ダンスで楽しもうとか。これだと、音楽は、いわゆる楽器演奏が余り得意ではない子でも参加しやすい单元があるかななどと思いますし、あと、「おはやしにチャレンジ」などということでも太鼓のも出ていますし、中学年を見ると教育出版が一番いいかなという気がします。確かに、上のほうの学年を見ていると、中野は合唱が非常に盛んですので、向いている曲が少ないと言われると、ああ、そうなのかなと思うのですが。ほかの教科は、学校公開とか学校訪問に行ったときに、先生の教え方とか、教科書のマッチングで見る機会が多いのですけれども、正直に申し上げて、音楽は見てもよくわからないのです。学校公開とかで行っても、歌っているところを見て、ああ、上手だなとか、もうちょっと人数が多かったらとか、ハモっているとか、楽器演奏でなかなかやるなど。教科書を使って指導しているシチュエーションというのは

正直余り遭わないのです。自分が音楽が余り得意ではないのでなかなか難しいところかなと思うのですけれども、とっつきのほうでいうと、現行のほうがいいのかななどと思うのですけれども。

ちょっと休憩にしましょうか。

午後2時40分休憩

午後2時53分再開

高木委員長

では、再開いたします。

今までのご意見の中では、低学年、中学年については現行の教育出版もなかなかいいのではないのかと。ただ、高学年については、歌唱曲、合唱曲の豊富さとかで教育芸術もいいのではないかという意見があって、なかなか拮抗しているところでございます。ちょっと事務局にお尋ねしたいのですが、学習指導要領の変更に伴って、特に音楽について考慮すべき事項というのはありますでしょうか。

指導室長

学習指導要領の変更ということよりか、現行の学習指導要領もなのでございますが、2学年で目標と内容が一つになっている教科がございます。国語もそうでありましたけれども、音楽がまさにそうございまして、そうなりますと、2年間は同じ教科書会社のものを使うという形になります。つまり、今の1年生がこの教科書を使っていると、来年も、採択がえがあったとしてもこの教科書会社のものを使うという形になります。

高木委員長

そうすると、具体的に何年生と何年生は、今回もし変更したとしても同じ教科書ということなんでしょうか。

指導室長

現在のでいうと奇数学年ですね。現在奇数学年の子どもが1年学年が上がったときに同じ教科書会社のものを使う形になります。

高木委員長

そうしますと、現行の変更が2年間の期間の教科書採択ということと、あと、教科用図書選定調査委員会の報告では、現行のものでいいのではないのかというご意見が出ていますので、特に今のものできていると。学校の先生方の意見には少し注文がついているかと思うのですが、一つ一つを細かく見ていくと、特に致命的というところとちょっとあれなのです

が、大きなものではなくて、こうなったらいいなというところの意見が散見されるレベルなのかなと思います。そうしますと、現行の教科書採択基準等々を勘案しますと、今の教育出版の教科書を音楽の採択候補とすることが適切ではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

高木委員長

ご異議ございませんので、音楽は教育出版を採択候補とすることにいたします。

それでは、予定の時間になりましたので、これで本日の協議を終了したいと思います。残りの種目につきましては、次回、8月1日金曜日午前9時から教科書採択について協議会を開会いたしますので、よろしく願いいたします。

これをもちまして、教育委員会第28回協議会を閉じます。

午後2時59分閉会